

プラトン著作におけるソクラテスの愛知

北
畠
知
量

はじめに

I 愛知の原点

II 幸福実現のための愛知

III 愛知の段階

IV 正義ある国家を実現するための愛知

V 宇宙論

結
語

はじめに

プラトンは、ほぼ半世紀にわたって、様々な作品（対話篇）を書き続けた。これらは成立年代に応じて、四つの作品群（ソクラテスの対話篇・初期プラトン群・中期プラトン群・後期プラトン群）に分けられるのが常である。これらの作品群中、ソクラテスは、中期プラトン群までの作品のすべてに主要人物として登場し、実に様々な形で、愛知の重要性を人々に訴え続ける。しかも彼は裁判に臨んで、愛知を止めなければ殺すといわれようともし「私の息の続かきり、私にそれができるかきり、決して知を愛し求めること（哲学）を止めないだろう」とさえ公言しているのである。

では、ソクラテスにとって、知とは一体どのようなものであったのか。また彼は何故に自らその知を求め、かつまた人々に、これを求めよと勧告し続けたのか。

本稿は、これらの問題が、作品群によってどのように論じられているかを概観しながらソクラテス（＝プラトン）の愛知思想の発展の跡をたどり、⁽¹⁾そこに何が読みとれるかを考えてみようとしたものである。

I 愛知の原点

『弁明』に登場するソクラテスは、自分が愛知してきたということ、また人間は愛知すべきであるということ、人々に力説している。ところがその理由に関してみると、彼は、デルポイの神託がもたらされる前と後とでは、明らかに異なつた説明をしている。この点を確認することから出発しよう。

ソクラテスは、デルポイの神託がもたらされた時、「わたしは自分が大にも小にも知(恵)ある者なんかではないのだということに自覚していたのに……」と告白している。⁽²⁾この場合、ソクラテスが知と言っているのは、前後の文脈から「善美の事柄」に関する知であつたということがわかる。つまり神託がもたらされる以前のソクラテスは「善美の事柄」に関する知を長年愛し求めていたにもかかわらず、その知をいまだに得ることのできない人物なのである。

では彼は、一体何故にその知を求めようとしたのであろうか。

その理由に関しては『弁明』のソクラテスは、ほとんど語ってはいない。従つて、すくなくとも神託以前の彼の愛知に関しては、ごく一般的な動機を想定するしかない。つまり、——自らの無知を自覚していたソクラテスは、「善美の事柄」つまり人間としての善さ(徳)について知れば、善美な人間になれると考えたから愛知しようとした——こう了解する他はない。善美な人間になることは、ポリス人達の理想であつた。当時の青年達も同じ理由で

ソフィストのもとに集まったのである。勿論そのような考えに基づいて知を愛し求めながらも、ソクラテス自身はソフィスト達の教授するような知には満足できず、未だに深い無知の中に在る。

ところが神託に接したソクラテスは、知者と称されている人々の無知を暴露し、神託の真意を了解した後では、この消極的な態度を改め、実に明快に、「いま神の命によって——と私は信じ、また解したわけなのですが——私自身でも、他の人でも、誰でもよくしらべて、知を愛し求める生き方をして行かなければならないことになっている……」と主張している。⁽³⁾ソクラテスはまた、魂の世話をせよ、徳に留意せよと述べ、自分はアテナイの人々を目覚めさせるために、神によって、このポリスにつけられたアブなのだと述べている。つまり、神託の真意を了解した後のソクラテスは、神命によって、自ら愛知し、同じく神命によって、他の人々にもこれを勧めてきたということになる。

ソクラテスは、神命を根拠に愛知を勧めているが、この勧めを受けた人々は、自分達が一体なぜ愛知すべきなのか、いまひとつはつきりしなかったことであろう。——確かに自分達は、徳とは何かという問いに答えることはできなかつた。だが、魂とは一体何であるのか、また知を愛し求めることで何故その魂がすぐれたものになり、どうして徳が生まれてくるのか——。このような質問に対して『弁明』のソクラテスは何も答えてはいないからである。『弁明』のソクラテスの言葉による限り、彼が人々に対してなしたことは、人々を吟味して無知を暴露したうえで、「思慮と真実に気をつかい、魂が優れたものとなるように配慮しないのは、ポリスの一員として恥すべきことだ」という感覚に訴えることぐらいだからである。⁽⁴⁾

『弁明』に関する限り、神命以外に愛知の積極的理由は見いだせない。ただ一箇所、自分は、愛知の勧めを通じて、人々を「ほんとうに幸福であるようにしよう」とつとめてきたのだ、と主張しているくんだりがあるが、これはまだ『弁明』のソクラテスの強く主張するところとはなっていない。『クリトン』でも、脱獄を拒否したソクラテスの最後の言葉は「……これまで通りにしようではないか。それが神の導きだからね」となっていて、神意が強調されている。

ということになると、ソクラテスは、善美な人になりたいと思つて愛知していたが、神託の真意を了解してから後は、神命を唯一の根拠として、自他共に愛知すべきことを確信したということになる。以上を図式化した場合、愛知の位置は次のようになる。

神命→愛知(魂の世話・徳に留意)……魂の善さ(徳)……善美の人(幸福)

ソクラテスの使命感あふれる愛知の勧告は、神命に基づくものである。神命による愛知。これがソクラテスの愛知の原点である。

II 幸福実現のための愛知

プラトンの著作を成立順に見ていくと、愛知の決定的理由とされていた神命は急激に影がうすくなり、これにかわって別の理由（幸福）が強調されるようになる。

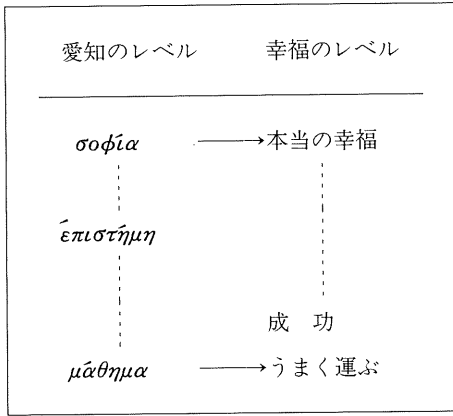
その発端は『プロタゴラス』に見いだせる。『プロタゴラス』は、『弁明』のおそらく数年後に書かれた作品であるが、ここに登場するソクラテスは、魂の世話をせよ、徳に留意せよという『弁明』の主張を受け継ぐ形で、如何にして徳性を高めることができるかという問題を論じようとしている。

ここに登場するソクラテスが最初に批判するのは、諸々の学識（魂の糧食）という商品を買えば徳性を高めることができるというソフィスト達の考えである。ソクラテスの説明によると、魂は身体よりも大切であり、人間のすべての幸・不幸は、魂の善し悪しにかかっている⁽⁵⁾ので、その魂の糧食となる諸々の学識の「どれが有益でどれが有害か」を知らないということは、大変危険なことなのである。この説明を図式化すると次のような形になるだろう。

愛知(有益な学識)——魂の善さ(徳)——↓幸福

ここでは、人間は幸福を目指しているということが前提とされている。その幸福を実現するために魂の善さを追

求し、そのために愛知するのであるから、愛知は明らかに神命とは別の理由（幸福実現）によってなされるべきものとされている。



この場合の知とは、学識・知識 (*μάθημα ἐπιστήμη*) である。それを我々は「直接魂そのものの中に取り入れて学ぶ」のである。では、これらを愛し求め、これらを学ぶことで、どうして我々は幸福になれるのであろうか。「愛知↓魂の善さ↓幸福の実現」を貫いているのは、一言で言えば、知の有効性という考えである。そして事実『プロタゴラス』に登場するソクラテスはプロタゴラスとの対話において「知（恵）こそは人間をたすけるだけの確固とした力をもっている」という考えを表明し、プロタゴラスに同意をもっている。

知は有効なものであるから、その知を愛し求めることによって幸福になれるのだという見解は、後の著作になると、より一層入念な形で表明されるようになる。例えば『プロタゴラス』よりも数年後に書かれた『エウテュデモス』の中で、ソクラテスはクレイニアスに、我々人間というものは誰でも「盲くいくこと（幸福であること）」を望むものであるが、その幸福は、善きものの正しい使用によって得られるのだということを確認させたうえで、知こそがその正しさを得させるものであると主張している。

「我々は皆幸福であることを心から望んでいるが、しかし、かようなものになるのは、物を用いること、しかも正しく用いることによってであるということがわかったし、それにこの正しき、成功というものをもちたらずのは知識であることがわかったから、それで人は皆できるだけ知恵のある人になるように、どうにでもこうにでもして身を修めなければならぬよ」

この場合の幸福 *eu noiatteu* という言葉には、幸福という意味と同時に、事がうまく行く（成功する）うまく運ぶ）という意味がある。そのような幸福を実現する手段である知は、当然二義的な意味内容のものとなるはずである。そして事実ソクラテスはこの両義を利用して、幸福をもたらずのは知（恵）であるという主張を導き出しているのである。このことは、愛知に新しい局面を開く契機となる。なぜなら、低次元の愛知は成功（事がうまくいくこと）をもたらし、高次元の愛知は「本当の幸福」をもたらずということになると、その間にいくつもの中間的な愛知の次元を想定する必要に迫られるし、かつまた、どのような人間にどの程度の次元の愛知が可能かということが問われることになるからである。

様々な人間の様々な幸福実現のための愛知。これが愛知の新たな局面となる。

III 愛知の段階

『饗宴』になると、愛知が幸福の実現に結び付く理由が、エロスの働きという視点から、人間の素質に対応する形で段階的（体系的）にまたダイナミックに説明されるようになる。

エロスとは、美と醜、善と悪、不死と死、等々の中間にあることから「中間者」という基本的性格をもっており、「よきもの」の永遠所有を目指すグイモン（神靈）であるとされている。従ってエロスに憑かれた人間は、様々な「よきもの」（美しいもの）にかかわり、その永遠所有を目指し、そのことで幸福になろうとするのである。勿論、死すべき存在である人間は、その「よきもの」を永遠に所有する事はできない。けれども、これを可能にする唯一の方法がある。それが「美しいものの中の出産」なのである。⁽⁸⁾

『饗宴』に登場するディオティマはこのような基本認識をソクラテスに与えたうえで、エロスに憑かれた人間がどのような段階を踏んで「よきもの（美しいもの）」にかかわり、幸福になっていくかを説いていく。ソクラテスは驚嘆しながらその説明に聞き入っているが、それによるとエロスの道は、そこを歩む当事者の能力（素質）に応じて次の二つに大別されている。⁽⁹⁾

一般の人々の場合。ここでは死すべき者は、肉体に関しても魂に関しても、出生という方法によって永遠に存在し、不死であることを求めているとされている。肉体の上で身ごもっている人は、女性に向かい、子供を生むこと

によって「不死と想い出と幸福」を未来永劫にわたって手に入れようとするが、魂の上で身ごとっている人は、「知恵とそのほかの諸々の徳（より美しく不死なる子供）」を産むことで、これを手に入れようと努めるのである。ここでは愛知による幸福実現は、重要ではあるが決定的な重みをもつに至っていない。

能力ある人々の場合。ところがこの説明の後でディオティマは、ソクラテスに対して、これまでの恋の道はあなただでも可能であるが、「見神に窮まる最奥の秘儀——を、あなたが受ける能力があるかどうか、私には何ともわかりません」と述べた上で、「導き手の導き方」が正しい場合には、恋（愛）の対象は肉体（性）から知そのものへ、また低級な知から高級な知へとレベルアップすることを説いていく。すなわち恋の対象は、一つの美しい肉体に始まり、すべての美しい肉体へ、美しい種々の人間の営みへ、美しい学問へという段階をたどっていくものとされるのである。その行程は「美の大海原に向かい、それを観察し、惜しみなく豊かに知を愛しもとめながら、美しく壮大な言論や思想を数多く生み出す」過程であるとされている。この後エロスの人は、突如として美そのものを観得することになり、更に、神に愛される不死の者になると説明されている。「最奥の秘儀」を受ける能力に恵まれたエロスの人とは、このような恋すなわち愛知を通して、不死と幸福とを実現しようとする存在なのである。¹⁰⁾

以上の局面における愛知は、総じて幸福実現のためのものであるが、ここでは、人々の素質によってその愛知のレベルには様々な段階があるということが強調されると同時に、「美そのもの」という言葉で、イデア論への展望が開かれることになるのである。

IV 正義ある国家を実現するための愛知

幸福実現のために愛知すべきであるという見解は、『国家』になると、個人的な局面を越えて、国民全体の幸福実現という局面で体系的に展開されるようになる。

愛知は、素質によって人それぞれであった。ではそのように多様な愛知によって、なぜ正義ある国家が実現し国民全体が幸福になるのであろうか。

『国家』のソクラテスは、(1)我々は一人一人では自給自足できない、(2)我々一人一人の生まれつきは自然本来の素質の点で異なっていて、それぞれが別々の仕事に向いている、(3)仕事をするには、それにふさわしい正しい時期がある、という前提から出発する。ソクラテスはこのことを次のように要約している。

「こうして、以上のことから考えると、それぞれの仕事は、一人の人間が自然本来の素質に合った一つの事を、正しい時期に、他のさまざまのことから解放されて行なう場合にこそ、より多く、より立派に、より容易になされるということになる。」¹¹⁾

このことの理論的根拠となるのは、次のような考えである。

すなわち、輪廻転生する魂は、定まった宿命を帯びてこの世に生じてくる。その魂は三つの部分（理知的部分、気概の部分、欲望的部分）から成り、これに対応するように、国家もまた、自然本来の素質の点でそれぞれ異なつた三つの種族（知を求める人間⇨哲学者、名誉を求める人間⇨軍人、金銭を求める人間）から成り立っている。魂の三部分がそれぞれ自己にふさわしい役割を果たすとき、そのような魂をもつ個人は正義の人となるが、国家においても、各々の種族が自分本来の仕事を守り、これを正しい時期に行うならば、その国家は正義ある国家となり、理想の国家となる。その時に、すべての国民は最も幸福となるはずである。

けれども、一人一人の子供がどのような種族の素質をもつて生まれてきたのか誰にも分からない。そこで、これらの子供が本来備えている素質にふさわしい種族になるようにしてやるための手立てが必要となる。そのためにまず、国の守護者（支配者と軍人）となるべき種族の人々のための教育課程が準備され、全体の中から守護者となるべき子供達の選別が行われるのである。次いで、その課程の最終段階（教に関する学問の段階）と併存する形で、更に、それとは別種の、国の支配者（哲人王）を養成するための、より一層高度で長期的な教育課程が開始される。この長期間の教育課程を終了し、「善のイデア」を觀想して眞の哲学者となつた者は、「大部分の期間は哲学すること」に過しながら、しかし順番が来たならば、各人が交替に国の政治の仕事に苦勞をささげ、国家のために支配者の任につかなければならない」とされている。このように、国家の中のあらゆる適材が適所へと配分される教育システムによって、国民全体に幸福がもたらされるはずだとソクラテスは主張するのである。

この場合、幸福の中身は、三種族によってそれぞれに異なっている。すなわち守護者は物質的・経済的には貧し

い条件の下で最大の精神的快樂（幸福）を得、これに反比例する形で、金儲けを仕事とする種族は、精神的には貧困な条件の下で最大の物質的・経済的幸福を得るのである。特に哲學者（愛知者）は、存命中に最大の快樂を得るばかりでなく、その魂は死後においても報われるとされている。

以上概観したように、『国家』では『弁明』よりもはるかに大きな全国民的スケールで愛知が論じられている。すなわち愛知は、素質に応じて各人を適所に配置する選別システムとして機能し、その知そのものは基礎的な知識から善のイデアに到る体系的な教育内容となり、更に愛知の行為は、現世での快樂（幸福）をもたらすだけでなく、来世の幸福さえをも保障するものとされるのである。従つて『国家』での愛知は、明らかに巨大な（教育）思想体系へと発展していることになる。ソクラテスはこのように愛知の思想を説き、諸字に通じた哲人王（教育計画立案者）のような様相を呈するに至っているけれども、彼は、「善のイデア」を觀想したわけではない。彼は、依然として自らの無知を自覚する者である。彼はあなたかもマラソンの選手のトレーナーのように、自分が未だに到達し得ない「イデアの觀想」へと到る教育計画を立案しているにすぎない。

V 宇宙論

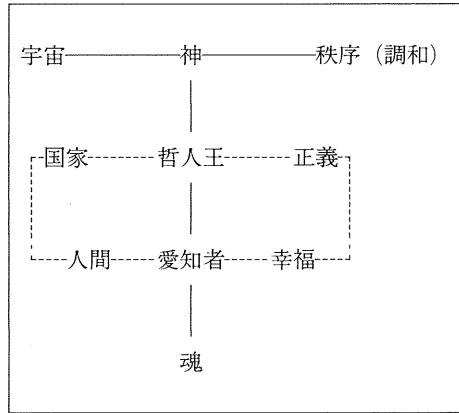
さらに『テイマイオス』になると、愛知思想の局面は、国家から宇宙論へと拡大される。しかしながら同書に登場するのは、もはや愛知者でも哲人王でもない。この局面で主役を演じるのは万有の構築者とされる神自身である。

万有の構築者（神）は「すべてのものが、できるだけ構築者自身によく似たものになること」を望み、無秩序に動いていた「可視的なもの」に秩序を与えた。その結果「この宇宙は、神の先々への配慮によって、真実、魂を備え理性を備えた生きものとして生まれた」のである。こうしてこの宇宙（四元素より成り、唯一不可分の生きた球形）は、「同」と「異」の調和であり、運動と時間の循環の源泉である一つの魂をもつものとなったが、未だに「生きもの」を包括してはいなかった。そこで神は、まず、天の種族（神々）を作りあげ、彼らに他の三つの「死すべき定めの種族」の製作を命じたのだとされている。⁽¹³⁾ 同書ではこの後まことに延々と、解剖学や生理学や病理学が演繹されている。

このように、『テイマイオス』では万有が秩序ある宇宙へと形成されていく原因と仕組みとその行程が示されている。だがここでは、人間的な愛知のダイナミズムは影をひそめてしまい、これにかわって、万有を善きものへ秩序づけようとする全知全能の神の意志が前面に出されている。勿論この思想を説いているのはテイマイオスであって、ソクラテスは一方的にこれを聞く者として登場しているにすぎない。つまりソクラテスが愛知者（知者）であるかどうかということは、ここではほとんど問題にさえなっていないのである。

ここまでくると興味深い事実が浮かび上がってくる。『テイマイオス』で語られるはずの宇宙の生成・変化の局面全体と、正義ある国家が実現されていく局面全体とが、マクロとミクロの關係で対応するという事実である。神は、宇宙全体に働きかけて、これを秩序（調和）あるものにしようとしているが、このことが、哲人王の国家に対する政務と対応してくるのである。ここまでくるとソクラテスの愛知思想全体は、生成・変化する壮大な宇宙論の一局

面といった様相を呈することになる。



結 語

さて、以上をまとめてみよう。

『弁明』のソクラテスは、人間の愛知の原点について説明していた。人間は、愛知し、徳に留意し、魂の世話をすることによってはじめて本当に善美の人（幸福な人）になれる。それ故神は、そのように生きよと人間に命じたのである。

この神命による愛知を原点として第一の局面が展開する。

神が人間に愛知を命じたのは、人間を善美の人（幸福な人）にするためであるが、知を愛し求めることでなぜ善美（幸福）になれるのかという点に関する理論的説明が、人間の素質に
応じて、つまり愛知のレベルに応じて、幾通りもの仕方でなされるのである。

この個人的な愛知というミクロな第一の局面と連動する形で次のマクロな局面が展開する。愛知は個人のレベルを越え、人間全体の幸福（国家の正義）という局面で論じられるようになる。これまでの説明から、人間はすべて愛知者となるべきであったが、その中でも特に素質のすぐれた者（哲人王）に国家統治をゆだね、他の者にはそれ

相応の役割を与えることで、国民全体が幸福になり正義ある国家が実現する筋道が示されるのである。

このような正義ある国家の実現というミクロな局面と連動する形で、神は、この宇宙全体を秩序（調和）あるものにしよつとしているという、更にマクロな局面が展開するのである。だが、ここに登場するのは神であり、もはや人間の登場する余地はない。以上を大まかに示すと、図のようになるだろう。このように図示すると、プラトン著作全体は、魂をアルケーとする自然学の体系といった様相を呈してくる。

神は、混沌たるこの宇宙（万物）に秩序（調和）を与えよつとしているのである。ソクラテスはこの神の命を聞いた。彼は、魂の世話をしてそれが善くなるようにすることこそが神の意であり、そのために人間ができることは、愛知しかないと解したのである。そこでソクラテスは、様々な局面にわたつて愛知を論じよつとするのである。

さてこれを教育の視点から眺めてみると、人間の登場する諸局面（図中の点線部分）が、つまり、魂がさまざまな人間の姿（基本的には愛知者↓哲人王）をまといながら、知を愛し求めていく諸局面が特に注目されることになる。

これらの諸局面においては、教育は、様々な人間の愛知にかかわり、これを促す機能をもった営みとなる。そしてソクラテスは、これらのどの局面においても、その教育をうけもつ最もすぐれた教育者として登場する。つまり彼は、最初は最も熱心な愛知勧告者（教育実践家）として、次の局面では、愛知によって幸福を実現することが可能だという理論を様々な形で展開してみせる教育理論家として、更に次の局面では、国民教育計画の最高立案者として登場するのである。

以上から、プラトン著作において見られるソクラテスの愛知思想の発展の内には、愛知の諸局面における最もすぐれた教育者の姿が示されていると言いうことができる。

〔注〕

プラトン著作からの引用は、J. Burnet: *Platonis Opera 5 vols Oxford Classical Text* を底本とするプラトン全集（岩波書店）によっているが、文脈の関係上、引用邦文にはわずかな修正が加えてある。

(1) プラトン哲学の発展という点に関しては、田中美知太郎の次のような見解が示唆的である。

「十九世紀以来の進化論や発展説に影響されて、多くの学者はプラトン哲学の前期から後期への「発展」とか、「進歩」とかいうものを、あたかも猿が進化して人間になるようなイメージで考えようとする。これは笑うべき誤解と言わなければならない。プラトンは前と全くちがった何かにならなければならないというような予断は、プラトンの理解にとつてあまり有効ではない。プラトン哲学は、『国家』までに作られた基本形をもとにして、その後いつくかの突出部をもつような生命体の活動として考えた方が、恐らく実際の理解には役立つのではないかと思う。『プラトン I』岩波書店、488頁

(2) 『弁明』 21 B

(3) 『弁明』 28 E

(4) 『弁明』 29 E

(5) 『プロタゴラス』 313—313 E

(6) 『プロタゴラス』 352 C—D

(7) 『エウリュデモス』 282 なおプラトン著作では、知に相当するいつくかの言葉 *sophia* *φρόνησις* *ἐπιστήμη* などは、決して

厳密に使い分けられてはいない。

(8) 『メノン』の場合、愛知(学習)とは、不死なる魂が既に学んでしまっていることを想起することであった。ところが『饗宴』になると、愛知可能なものが中間者という一定の枠内に限定される。そして愛知のメカニズムは、想起ではなく、出産という概念によってダイナミックに説明されるのである。

(9) ここに登場してディオティマの話聞いているソクラテスは、勿論熱心な愛知者ではあるが、その愛知能力がどの程度のものであるのかは、ディオティマにも「わからない」とされている。ここに初めて、人間の愛知能力(素質)には個人差があるという考えが公式に示されるのである。

人間の素質ということに関して、ソクラテスは人間の素質の違いを否定していたが、プラトンは人間の自然本来の素質を重視しようとしたとよく言われる。その根拠として、ソクラテスは『メノン』で奴隷少年を相手に想起の実演を行ったり『弁明』の中で、すべての人々(老若を問わず、だれにあっても:30)を吟味しようとしてきた点などが指摘される。しかし

1、素質という考えは、階級社会に生きる古代人にとっては、なじみやすい考えであった。

2、ソクラテスが素質平等論者であったとしても、次のような体験は自説を修正・放棄する要因として働いたはずだ。

『メノン』……こうした目に合わせられた人は二度とソクラテスの許に近づかなかった。

『弁明』……ソクラテスは人々を吟味して多くの人々に憎まれたと告白している。

『雲』のソクラテスは、ストレブシアデスの出来の悪さにあきれはてている。

3、初期対話篇のソクラテスは、人々の知的レベル(素質)に合わせて無知を暴いている。

などの点から考えると、ソクラテスは、「もって生まれた素質というものは、如何ともしがたい」という考えの持ち主であったと了解した方がよい。

- (10) 『饗宴』 210—211 D なおこのプロセス全体をエレウシスの密儀と関連させて捉え、その全体からテトラクテュスを読み取る
うとした論文、大沼忠弘「恋の密儀」(理想一九七八)が興味深い。
- (11) 『国家』 370 C
- (12) 『ティマイオス』 30 C
- (13) 『ティマイオス』 39 E